

# 厨房見聞録 暮らし食堂



いつもご愛顧いただきありがとうございます。

食欲の秋!  
ワンコインで食べられる日替わり定食がお勧めです!  
また特選もち豚を使った料理もどうぞ!

- とんかつ定食・・・ 600円
- 生姜焼き定食・・・ 600円
- カツカレー・・・ 700円
- カツ丼・・・・・・・ 650円
- カツとじ定食・・・ 700円

その他魚料理なども豊富に取り揃えて、  
皆様のお越しを心よりお待ちしております。

## 鶴見橋暮らし食堂

- 【営業時間】ランチ: 11:00～15:00  
                  晩 酌: 17:00～21:00
- 【定休日】日曜・祝日
- 【住 所】大阪市西成区鶴見橋2-12-30
- 【連絡先】06-6562-1222



N=NICE VIEW(ナニの観望) T.A=ART(芸術)&AMUSE(楽しむ) V=VENTURE(冒険) E=EVENT(出来事) S=ISSUE(号) vol.67

たね

12年9月号

## 田んぼの草刈作業に行ってきました!!【楽塾】

夏休みただ一度の野外授業として、大柳生の農場へ草刈に行ってきました。

南垣内さんと畑地で合流し、貸りた道具で自分たちが植えた稲田周辺の繁茂する雑草を刈り込み始めます。大きく伸びた草は、私たちの胸の位置くらいに伸びたものもありました。この日、大阪とおなじく奈良市内も快晴で、空を見上げるだけでまぶしく、炎暑の厳しさはありましたが、しかし湿度が比較的穏やかで、作業はしやすかったと思います。

木工センターの休憩室でお弁当を食べたあと、南垣内さんから冷たいスイカの差し入れをいただき、緑陰でのデザートになりました。



センター東方向に、農業体験のために使う1反(300坪)ほどの農園があり、ここに私たちは今年の6月、サツマイモや落花生の苗を植えてきました。とくに落花生の周囲には雑草が覆っていて、落花生と雑草の見分けが困難です。これら雑草と落花生の茎とをえり分けながら刈り取ることにしました。

その作業の中で、落花生に小さな黄色い花がついているのを発見しました。ポツンポツンと目立たない程度に花をつけているのですが、小さく地味ながらもその存在を知らせていました。

その後、農園の周囲を覆う雑草を草刈機で整理し、あつ苦しい風景がさっぱりしたところで予定の作業を終えました。南垣内さんの農場で取れたトマトを、野外センターのテラスでいただき、全員がひととき気持ちよく緑風にひたっていました。

南垣内さん、野外センター長の山本さんには秋の稲刈りを約束し別れを告げ、帰りにはちょっと奈良町を散策し、無事帰阪出来ました。



発行日 2012年9月1日  
創刊日 2007年1月1日  
発行 株式会社ナイス  
発行人 代表取締役 富田一幸  
印刷 尚前山企画  
住所 大阪市西成区長橋3-6-33  
電話 06-6563-1156  
E-mail info@nice.ne.jp  
HP http://www.nice.ne.jp/

**大柳生のやぎ**  
⇒詳しくは裏表紙「楽塾」の項をご参照ください

# 西成特区構想見聞録

## — 第6回有識者座談会 —

田岡秀朋

去る8月7日、第6回西成特区有識者座談会に田岡くんがゲストスピーカーとして参加しました。今回のダイアログはその様子をお伝えします。

あくまで、田岡くんの個人的な議事要旨です。詳しくは大阪市のホームページにて配布資料・議事録等が閲覧できますので、興味のある方、正確な情報を得たい方は下記をご参照ください。

●大阪市 西成区特区構想プロジェクト 西成特区構想有識者座談会  
<http://www.city.osaka.lg.jp/nishinari/category/2033-2-0-0-0.html>

### 西成特区構想有識者座談会

西成特区構想に向けて、学習院大学経済学部教授 鈴木亘氏を座長とする西成特区構想有識者座談会が6月からスタート。座談会は約4ヶ月の期間で計12回の予定。地域の各団体、有識者、学識経験者等がテーマごとに集い、自由闊達な意見交換を行なっています。座談会のミッションは、西成特区の中長期的な方向性・ビジョンを打ち出し、実現のための具体的な施策と工程を示すことです。

この座談会では歴史的経過で形成された日雇労働者のまちであり、いまだなお様々な課題が山積する「あいりん地域」を抱える西成区という視点で、各種の議論が行われています。

前半の座談会では、地域を中心にアイデアと現状報告、意見交換を行い、大きな方向性と地域活性化に向けた意見交換がなされまし

た。そして、後半からは個別テーマ毎に有識者等を招く形で「福祉・子育て・教育・就労支援・医療・社会資源」などにフォーカスした形で座談会は運営されています。

第6回のテーマは「生活保護受給者・野宿者への就労支援、社会的起業」でした。座長の鈴木氏の問題意識は3つ。

#### 西成特区構想有識者座談会 予定

次第	発表者
第1回:平成24年6月11日(月)	
・現在の西成特区構想の状況について ・今後の議論の進め方について	
第2回:平成24年7月3日(火)	
・西成特区構想有識者座談会の議題案について ・「(仮称) 萩之茶屋まちづくり拡大会議」からの報告 ・「釜ヶ崎のまち再生フォーラム」からの報告	・鈴木座長 ・寺川委員 ・ありむら委員
第3回:平成24年7月9日(月)	
・国際観光、観光振興策、ターミナル化、屋台村構想について	・松村委員
第4回:平成24年7月20日(金)	
・あいりん地域雇用問題の現状といくつかの提案について ・福祉と就労のワンストップ化、トータルケアなど	・福原委員 ・ありむら委員・織田委員
第5回:平成24年7月27日(金)	
・子育て支援の在り方、教育問題、教育振興策について	・鈴木座長・西川さん ・荘保さん
第6回:平成24年8月7日(火)	
・生活保護受給者・野宿者への就労支援、社会的起業について ・地域医療の再生、医療扶助問題、結核対策について	・沖野さん・炭谷さん ・田岡さん・松本さん
第7回:平成24年8月7日(火)	
・地域医療の再生、医療扶助問題、結核対策について	・馬場谷さん・坂本さん ・高島毛さん・原委員
第8回:平成24年8月10日(金)	
・子育て支援の在り方、教育問題、教育振興策について	
第9回:平成24年8月17日(金)	
・生活保護と第二のセーフティネット活用、福祉施設等の社会資源のあり方について	
第10回:平成24年8月21日(火)	
・アトによる振興策と住宅まちづくり、商店街の活性化策、防災対策について	
第11回:平成24年9月上旬	
・環境問題、衛生問題、治安問題への対策について	
第12回:平成24年9月上旬	
・あいりん総合センター、新今宮駅周辺再開発、未利用地活用、その他の課題について	

- ①野宿者・生活保護受給者の働く場づくり
  - ②厳しい財政状況を認識したうえでの働く場づくりの行政支援
  - ③民間力活用型の社会的起業に向けたコーディネート手法
- でした。

認め、一説には生活保護等への抑止効果は10億円近いものがあると言われていますが、100%公費である点に大阪市政改革プロジェクトチームの厳しい見解が示されているようで、新たな「特別清掃」の展開は西成特区の大きなテーマの1つです。

### 高齢者特別清掃事業

まずは、あいりん地域の高齢日雇労働者を中心に事業が展開されている「高齢者特別清掃事業」について、NPO釜ヶ崎支援機構 事務局長 沖野氏より報告がありました。

1994年の特別清掃事業成立の背景には、1990年年初頭のバブル崩壊による日雇労働者の大失業があり、あいりん対策の位置づけが、「日雇い労働市場を支えた民生対症的」なものから「就労生活保障対策」へと、転換があったことを指摘します。55歳以上の日雇労働者で生活保護を受給していない方々が輪番制で、清掃等の仕事に従事する特別清掃事業。その価値は「収入の確保」だけではなく「社会の一員としての自覚」「働く自尊心と居場所の獲得」にあり、やむを得ず生活保護受給者となった場合でも、特別清掃の経験が地域での安心したくらしにつながっていること。そして、特別清掃従事者の90%が「生活保護をいまずぐ申請しない」意向をもち、40%近くが「アルミ缶収集やパート等に従事」し、公的支援ばかりに頼っていない姿を明らかにします。

誰しものが「特別清掃」の価値と役割を

### ソーシャル・ファーム

続いて、恩賜財団済生会 理事長炭谷氏によるソーシャル・ファームの西成における可能性の報告です。

2,000万人の求職者や若年ホームレス、累犯高齢者の増加など、社会の底が抜けたとも言える日本の社会的問題が象徴的に表れているのが「西成区」。その西成区での問題解決が日本全体の問題解決に向けた一つの試金石となりうる考えを示します。そして、グローバル化した先進国共通の課題でもある「社会的排除」への対策「ソーシャル・インクルージョン(社会的包摂)」の理念に基づく取り組みが重要であり、その中心には「住民参加」「就労・教育の機会」「第3の職場」が大切であると述べます。

特にソーシャル・ファームとも呼ばれる「第3の職場」への期待では、行政・企業単独での取り組みの限界を指摘した上で、行政と企業のハイブリット型の職場づくりに取り組む事例を紹介しています。その中でも東京都江東区の「エコミラ江東」の廃プラリサイクル事業や釜ヶ崎支援機構の自転車リサイクル事業等を取り上げ、西成区の新産業の可能性として、「3R環境産業」の集積の提案がありました。



A ワーク創造館

続いて私の出番。なれない役割で、わずか15分の発表にも関わらず、大量の資料を用意しましたが、その中から「社会的起業としてのA ワーク創造館」「被保護者向け事業」「PSソーシャル・ビジネスセンター（以下PSSBセンター）事業」を中心に、働く場だけでなく、働きたい人々のエンパワーメントの重要性を述べました。

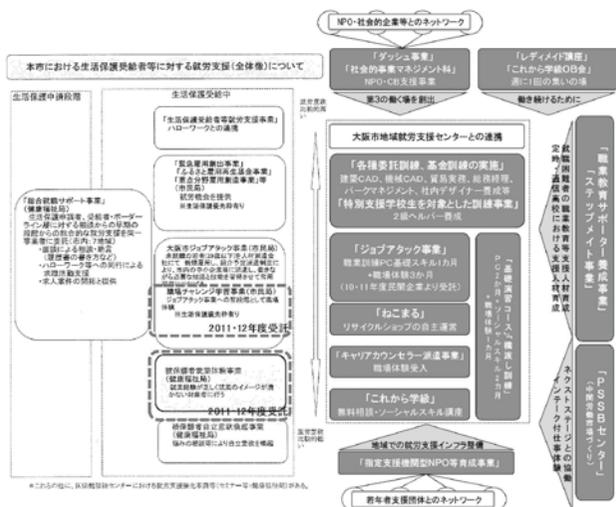
A ワーク創造館では、公共からの委託事業として、2つのタイプの就労支援事業を展開しています。1つは大阪市の被保護者支援事業等の典型モデル「座学＋職場体験」である「ジョブアタック」「職場チャレンジ学習」「被保護者就業体験」の3事業。各コースが想定する就職準備性・意欲等に合わせた「座学」や「職場体験」を実施しているものの、既存スタッフのみで受講生が抱える個別の悩みへのアプローチの限界。また、緊急雇用活用型では受講期間中の「給与」が他のバイト等と比して遜色ない金額となること、受講期間中の就労インセンティブとして機能しづらい現状を伝えます。安い「給与」であったとしても、「住まい」「食費」など都市型生活には欠かせない費用を応援することで、就労にむけたインセンティブづくりはできないかと提案しました。

もう1つの就労支援事業は、2つのL P(ネクストステージ大阪・大阪職業教育協働機構)のJVで実施するPSSBセンターの取り組みを報告しました。大きな特徴は2つ。1つは「それぞれのステージに合わせた『働く場をつくる』」。もう1つは『『できること』に着目した職場体験』。

『働く場づくり』では「6次産業化」をコアコンセプトに農業・加工(調理)・販売に仕組み、特にイニシャルコストが比較的安価な販売事業「まちかどマルシェ」を紹介しました。

『できること』に注目する職場体験では、A ワーク創造館内の各種業務を職場体験前の「インテーク・アセスメント期間」として活用。実作業を伴うグループワークの中で定期的な面談を繰り返しながら、客観的な職業適性評価を行い、適性に応じた次のステップにつなぐことで、自己効力感を高められるような職場体験を目指していることを報告しました。

A ワーク創造館事業と大阪市被保護者就労支援事業の対比



そして、最後に、既存の教育・福祉・雇用などなど各種の施策から漏れ落ちてしまう人々がいる現状では、「いつでも・どこでも・だれでも・学べる場」としての日本版コミュニティ・カレッジの創造が肝要で、働く場づくりだけでなく、それぞれの「できること」を伸ばす機会提供が不可欠ではないかと、提案をしたつもりです。

就労準備性に併せた様々な職場体験先例

八百屋マン本店	40万円/日 雇用3人+訓練2人	ビジネス型
コロクマン・ピアノ	3万円/日 雇用3人+訓練2人	
弁当屋・りぶら	2万円/日 雇用2人+訓練4人	サポート型
まちかどマルシェ 花屋Bon	1万円/日 雇用1人+訓練4人	
塾塾・農業生産部門	社会的居場所 多様な環境調整	

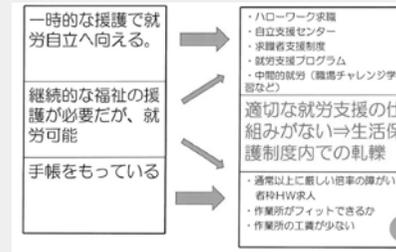
若年困窮者支援に必要なこと

最後の提案者は釜ヶ崎支援機構の松本氏。若年者支援の現場から「就労前段階の支援の重要性」「ホームレス経験者対応型就労継続支援の必要性」が発表されました。

「職場チャレンジ学習」の参加者の中には、障がい者手帳を有してはいないものの、一般的就労へ即座に向かえない方々が多く存在し、生活支援だけではなく、ホームレス経験に即したSSTなどの教育機会の提供が不可欠と問題意識を提示します。

その解決策の1つとして、「ホームレス経験者対応型就労継続支援」という概念を示し、「教育機会」+「就労機会」をミックスさせた社会的起業の育成と、事業者間連携を促進するエンパワーメント連絡協議会の設立を提案されました。

就労準備性に併せた様々な職場体験先例



あとは「誰がやるか」

各発表の後、各委員の方々との意見交換がありました。そのなかでも印象的だったのは、いけしゃあしゃあとアイデアを発言した自省も兼ねてですが、ありむら委員の「特区構想の前にも、同じような事をずっと議論してきた。アイデアだけではなく、実戦部隊として、誰がこのまちで事業を実施するのか。その部分で社会的起業を志す人々とこのまちをどうつなぐか。」という発言でした。

奇しくも炭谷氏も「ソーシャル・インクルージョンは『具体的事業』で」と発言していたように、啓発やアイデア合戦で特区構想を終わらせてはいけない。このチャンスにまちとひとの好循環を生み出す事業や仕組みを1つでもスタートさせることの大切さを実感しました。

そのためにも外部からの社会的起業の誘致にとどまらず、地域の特徴や課題をマーケットとして見つめなおし、地域の人材を育成し、これらを活用しながら、財政危機の行政と不況下の民間企業のコラボができる中間支援機関=A ワーク創造館として更に成長し、お役に立てることがあれば、その役割を果たそう。そう思いました。

※3R環境産業…「リデュース(Reduce)=減らす・リユース(Reuse)=もう一度使うこと・リサイクル(Recycle)=再利用する」の3つの頭文字R。家電リサイクルや古本、古着、廃プラスチック活用等、循環型産業のこと。



## 第11回

## 街頭テレビ

1953（昭和28）年2月、NHK東京放送局がテレビ番組の放映を開始し、続く日本テレビが8月に開局して、わが国のテレビ放送がスタートしました。私といえば小学3年生で9才の頃のことです。テレビ創世記の時代に立会い、すでに60年もの歳月を経てしまいました。その年、「NHKは相撲中継や、甲子園における高校野球中継などを放映しはじめ、日本テレビは開局にそなえ、街頭テレビを東京都内29ヶ所、周辺部に13ヶ所設置した」（昭和史全記録／1989年毎日新聞社）とあります。そして同年12月31日にNHKは、紅白歌合戦を日劇で公開放送したとの記録もありました。

当時テレビ受像機（白黒）は17インチで20万円近くもして、一般家庭には到底買える品物ではなく、いわば超ぜいたく品でした。それでもNHKの受信契約数は866所帯あり受信料は月額300円で、この頃NHKラジオの受信料は月額67円でした（同書）。



小さなテレビにこんなにたくさんの群集が

我が家にテレビという機械が入るのはまだまだ先のことで、その間、テレビをさまざまな場所をさすらい

ながら見せてもらい、未知との遭遇に刺激と興奮を与えられていました。そのひとつがキャンディ屋さんで、氷菓を売るお店でした。アイスクリーム、アイスキャンディを中心に、店のオヤジが自家製の商品を作っていました。ただし夏場のイメージが強く、冬の季節に何を売っていたのかまったく記憶がありません。このお店の中には早くからテレビが鎮座していました。めったにキャンディなど買えない私たちがガキどもは、お店全体がガラス張りだったのを幸いに、店内奥に置かれたテレビを、目を細めながら見入っていました。しかしあまり長く見続けているとオヤジが、「もう行き」といって手を振ります。ガキどもはそれを汐に見るのをあきらめて帰るのです。その時にどんな内容の番組を見ていたのか覚えはありません。きっと内容よりも視覚的な驚きを楽しんでいたのでしょう。

小学校の夏休みや冬休みになると、私を可愛がってくれた和歌山の伯母の家に、目いっぱい休暇を使って遊びに行きました。伯母の家にはテレビがあり、ここでは連続ドラマやバラエティが見られるので、「日真名氏飛び出す」（これは民放だったと思う）や「私の秘密」「ジェスチャー」「バス通り裏」（以上NHK）などを休みのあいだ見続けていました。又洋画ものでは「ハイウエーパトロール」とか「アイ-

ラブ・ルーシー」のファンで、テレビが誕生した当初のドラマやバラエティを同時代に見ることが出来て、これらは不思議に強く覚えていてます。

中学校になる前に引越しをしました。これまでの環境とはちがいテレビのある家が多く、2、3の家庭に上がりこんで、「月光仮面」とか「やりくりアパート」などを見せてもらったものです。そしてちょうどこの頃、力道山を中心としたプロレス人気最高潮でして、とくに日米対戦（力道山対ルーテーズ、力道山・木村組対シャープ兄弟など）が大人気でした。そんな中、大阪でも街頭テレビがあちこちに登場し始めます。私が住んでいた東住吉区田辺では、山坂神社横にある縦長の公園の一角に設営されました。

第二次大戦でヤンキーに席卷された恨みつらみは、われら少年たちもいくばくかは抱え込んでいて、邦画製作会社の戦争映画などで、米空軍や艦船をやっつける場面では映画館の中で拍手が沸くほどの感激を経験したものです。プロレスも同じで、力道山の空手チョップが米レスラーに炸裂すると、テレビの中のアリーナだけではなく、テレビ前に集まってきた大群衆も歓声を上げ、アメリカ人をやっつけたといっちは喜びに包まれるのです。そしてこれは街頭テレビの風景なのでした。

プロレスなどの人気プログラムの時には、街頭テレビの前に常時300人以上の群集がテレビを見に集まっていたと思います。今から思えば、あんな小さな画面にあれほどたくさんの人たちが吸い寄せられていたなどは信じられません。なにせテレビは20インチぐらいの大きさで、しかも白黒の色なしです。「アメリカ倒せ！力道山がんばれ！」の声援は、

もう熱狂としかいいようがありません。画面が見えようが見えまいが、テレビの前面で見る観客の応援の熱波が最後尾にまで感染し、一体感を作ってしまうのでした。東北震災やオリンピックで叫ばれる「がんばれ日本！」などの原型はこの時代にもあったのです。熱狂というちょっと恐ろしい感動。

テレビを持たない家庭にも、隣近所の人たちは受容して見せてくれました。それは醤油や米がない時、近所同士貸し合ったことと同等の価値であったのです。街頭テレビも、テレビを持たざる人々に、同じ時間を共有させたという意味では立派なサービスでした。

プロレスの実況中継はおもにプライムタイムで、よそ様の家に闖入してテレビ観戦することなど、さすが子どもであっても遠慮したものでした。それは間接的に子どもの常識とかけつなげていたのかもしれない。

ところで街頭テレビの放映時間ってどうなっていたのでしょうか。時間限定だったのか、フルタイムの放映だったのか。私の記憶では街頭テレビは夜に見た記憶しかありません。それもプロレスだけが鮮明です。1963年にはテレビの普及率は90%になったといえますから、各家庭にテレビがいきわたると同時に、街頭テレビもプロレスまでもが町の風景から消えていきました。



プロレスラー／力道山

# アウトドア・スポーツを楽しむに 南河内の公園に出がけませんか？

秋の良好な気候の中で、ありのままの自然に囲まれたキャンプ場でアウトドアを楽しみ、また、河川敷の良好な芝のパークゴルフでスポーツを楽しんでみませんか？

## 長野公園 天野山キャンプ場

料金：1サイト1日3,500円  
設備：炊事棟、デッキシェルター、トイレ水道、野外炉  
※・1サイトで30名程度が利用可能  
・駐車場無料(10台程度)  
・キャンプ場内での直火は禁止  
・利用には予約が必要  
お問合せ：長野公園管理事務所  
0721-62-2772



## 石川河川公園 パークゴルフ場

料金：平日500円、土日祝600円(1ラウンド)  
料外：パークゴルフ専用クラブ200円(1日)  
受付：9:30~15:30(利用は17:00まで)  
定休日：毎週火曜日(祝日の場合は翌日)  
及び12月29日~1月3日  
※・小学生未満はご利用できません  
・1ラウンド18ホール/パー66  
(Aコース9ホール/Bコース9ホール)  
お問合せ：石川河川公園管理事務所  
072-956-1900




**都市公園管理共同体**  
<http://www.toshi-kouen.jp/>

## プードルペンギンキョウ



私のかかりつけの病院に  
 看板犬のワンちゃん住居ます。  
 名前は「ゆずちゃん」。  
 とても元気な1歳のラブラドルの女の子。  
 「こんにちわ」って挨拶すると、  
 「いらっしやい」と迎えてくれて、  
 「大丈夫？」と心配してくれる。  
 診察が終わって待合室に戻ると  
 「良く頑張ったね」とほめてくれる。  
 帰り際には「早く元気になってね」と  
 励ましてくれる。  
 8歳の私にとって  
 これから病院はお世話になりがち。  
 あまり好きな場所ではないけれど、  
 ゆずちゃんが居てくれたなら  
 大丈夫って思えるかもしれない。  
 照れくさくさいつもそのままバイバイだけど、  
 ゆずちゃん本当にありがとワンワン!!  
 M A

# ポロの 就労市場が ぼん

## 橋のない川に橋を架けるのはだれ？

厚労省は、生活保護制度を改革するために、7月「生活支援戦略」の中間まとめを発表したが、不正受給防止や就労自立を促すには、ケースワーカーだけでは手が回らないから、NPO等の手も借りて「総合生活相談センター」を設けるという案も含まれている。察するに、内閣府がモデル事業で実施してきたパーソナルサポート(PS)事業も、ここに収斂されていくのだろうか。

PS事業は「個別支援」と訳すのが適当だろうか。要は、ケースワーカーが「就労指導」するのに対し、PSは「就労支援」と理解したい。「指導」という上から目線と違って「支援」は、個別事情に寄り添う分、手間暇がかかる。個別事情が複雑化しているからだが、それだけじゃなく、労働市場の方も「即戦力」などと称してガードが堅いから、手間暇はさらにかさんでしまう。その意味で、福祉事務所から離れて「総合相談」するセンターを設置するのはうなずける。問題は、そのセンターがどこに位置するかだ。「福祉」に近づけば、困難の深さに寄り添えるが、出口は遠くなる。「労働」に近づけば、市場の偏狭さに愕然としてしまう。度し難い分裂、「橋のない川」がそこにある。

何故「橋のない川」になったのかと言えば、福祉が「制度」に、労働が「利益」に絡めとられてしまったからだ。そもそも、「子供叱るな来た道じゃ、親泣かすな行く道じゃ」という寛容があつて

の福祉や労働だったはずだが、どこかに忘れて、制度万能論、利益至上主義に陥った。そこで、労働市場の寛容を再発見するものとして、ボクは「中間労働市場」と言い続け、これで「橋を架ける」と構想してきた。この「橋」の上こそ、総合生活相談センターを設置するのであれば、手間暇の甲斐がなくなってしまう。

じゃ、どこに「橋」はあるのかと言うと、ボクは、それが「雇用産業」となったビルメンテナンス産業とか、自治体の公共サービスとか、地域の福祉・介護事業とか、はたまたA'ワーク創造館のような職業訓練施設とかを想定してきた。厚労省も「中間的就労」と言い出しているが、ボクの中間労働市場とはちょっと違う。通常労働市場

への「中二階」という点は同じだが、いまは中間でも、そのうち通常に昇格する、そもそも「成長産業」であるということと、就労支援を組み込んでこそ成長産業であるという点を見ているか否かが違う。つまり、厚労省には成長産業は見えない、見えない分、総合生活相談センターは福祉に近くなる、すなわち、厚労省の権益拡大になってしまい、必然的に支援スタッフの配置となり、人件費中心の事業になりかねない。ともかく、就労支援という面での総合生活相談センターは、限りなく労働市場に近くないといけないし、人件費中心の事業ではいけない。

(株)ナイス代表取締役 富田 一幸



## 七人の侍



監督：黒澤 明  
脚本：黒澤 明  
橋本 忍  
小国 英雄  
音楽：早坂 文雄  
キャスト：三船 敏郎  
志村 喬  
宮口 精二  
製作：原研・モノプロ制作部  
DVD発売：DVD BOOK 小学館

「梅田コマ劇場」は1956（昭和31）年、阪急や東宝を創始した小林一三が、大衆性ある劇場をつくるという理念で完成させた芝居小屋である。90年初めに廃館となったが円形舞台を持つ関西大衆演劇の拠点であった。今はこの地に漫画的ともいえる観覧車をランドマークに「HEP FIVE」が建つ。このコマ劇場には「梅田コマ・ゴールド／コマ・シルバー」という2つの地下映画館を併設していて、たしかゴールドは洋画、シルバーは邦画（東宝系）を上映していたと記憶する。

「七人の侍」の封切りが54年の年で私は10才の頃だ。リアルタイムで見ることが出来なかったが、高校1年生の時に「梅田コマ・シルバー」で見た。「梅田コマ劇場」建設の3年後（59年）という計算だ、つまりロードショーから5年を経たリバイバル上映で「七

人の侍」を初めて観賞したことになる。

地下の劇場は100人ほどのキャパであったが満員で、話題の映画ということもありタバコの煙と熱気が充満していた。そして、冒頭から流れる早坂文雄の音楽が、「七人の侍」という映画を忘れなくさせてしまった。重苦しい無伴奏歌に続く侍たちの勇壮な旋律をその場で覚えてしまった。成人後の話だが勤め始めた事務所でテーマ曲を口ずさんでいた時、映画の好きな先輩が「それ七人の侍やね」と指摘した。それが映画を話す契機となり、フランスのヌーベルヴァーク、イタリアのネオリアリズムなど、世界の映画を知る転機ともなったフィルムであった。

「七人の侍」が製作されるまで、チャンバラといえば東映と決まっていた。歌舞伎の様式を基本に、美しい衣装を着た美男美女のスター俳優が出演し、セット撮影を中心とした勧善懲悪の映画づくりが人気だった。そしてぼくら少年たちは、東映映画で正義は必ず勝つ！と教えられた。しかし黒澤監督が演出したこの映画は、東映映画がテーマとしていた講談調の世話物や侠客伝、出世物や武将記などとは大きく異なっていた。

それは、スター性をなくした群集劇であり、その骨格をなすのは、戦国の世から敗残した名もない食いつめ浪人たちと、その侍たちに日常の食を約束する代わりに、用心棒として雇い、野武士の襲来から身を守ろうとする農民たちの物語である。つまり武士階級から収奪され続けてきた百姓が、

主（あるじ）を探し仕官を求める侍に用心棒を託すという、いわば無産者が支配者側にいるべき侍たちの主となる、階級逆転の映画であったといえようか。

とくに時代劇の醍醐味である殺陣様式がまったく新しく、ひと言でいえばそれは“超絶”であった。すさまじい斬りあいや雨中の戦闘シーン、押し寄せる野武士たちの操る騎馬の群れ。血のりで切れなくなった刀の補充のために刀を戦場に立てかけ、それをとっかえひっかえしながら敵を倒していく。それは従来のチャンバラ映画では見たことも、味わったこともなかったリアルな視覚体験であった。

やむなく無産者側の食をあてにする侍たちのそれぞれ陰影ある人物描写と、凶たく狡猾で常に自分の利をしか考えない百姓たちとの非対称性がきわだって表現され、よくある弱者すなわち善、あるいはプロレタリア礼賛でないのが、この映画のスケールをすぐれて大きくした理由だと思う。

息つく暇さえ与えないストーリー展開に加え、共同体に依拠する農民たち、食わせてもらうことだけで彼らを助けざるをえない七人の武士。そして農民が命をかけた収獲物を奪いに来る野武士たち。この生物連鎖を見事に3時間30分という長尺のフィルムに凝縮させた黒澤の力量はもう神業としか思えない。

野武士とはいえ、相手はいくつもの飛び道具（種子島）を持っている。いかに強い

侍たちでも、4人までもが種子島で犠牲になる。侍たちが立ち向かう道具はいつも刀である。それは侍という矜持（きょうじ）を持ちながら、種子島に挑む姿勢であるが、一方でチャンバラ映画とはいえ、この時代もうすでに刀の時代ではないという監督のアンチテーゼとも受け取れるのだ。普通の映画なら射殺されたあとも、今わの際の苦しい言葉でのたうちまわり執念を見せて死んでいくものだ。4人の侍たちの死はあっけらかんとしていて、死を惜しむいとまも見せず、主人公たちの死を観客たちの同情や執着や悲嘆という感情さえ求めない。これが監督の映画術というものだろう。

「七人の侍」がいまも光彩を放つのは、七人の侍たちのそれぞれの人物造形にある。とくに寡黙（ほとんどセリフがない）だが、腕の立つ剣客である久蔵（宮口精二）の有無を言わせないかっこよさは何度見ても身震いする。監督みずから、若者勝四郎（木村功）が久蔵に「あなたは素晴らしい人だ」と劇中で言わせているほどだ。また軍師役勘兵衛（志村喬）の立ち居振る舞いが、この映画の重厚さや品格を決定しているし、菊千代（三船敏郎）の破天荒さが野武士襲来からの緊張感を和らげる。当時はまだ名のない俳優たちを叱咤激励し、活きた人物像を作り上げた黒澤監督の狂気である「七人の侍」を越える映画をいまだ見ることはない。